

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780096

研究課題名(和文) 昭和戦前期日本のインテリジェンス活動 対外政策への影響に着目して

研究課題名(英文) Japan's Intelligence Activities from the Sino-Japanese War to World War II

## 研究代表者

宮杉 浩泰 (Miyasugi, Hiroyasu)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究員

研究者番号：30613450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、戦前期日本におけるインテリジェンス活動の実態解明を目指し、先行研究において取り上げられることが多かった陸海軍によるインテリジェンス活動のみならず、外務省や出先機関によるインテリジェンス活動にも注目した。その結果、先行研究では十分に解明されてこなかった外務省と陸海軍、あるいは本省と出先機関との関係を解明することが可能となった。この知見はオーソドックスな外交史研究とは異なる視点を提示したことを意味しており、今後の外交史研究を発展させる上で重要な視座を提供したと史料する。また、本研究課題で解明された事実は、日本政治外交史のみならず、国際関係論などの分野に対しても、波及効果が期待できる。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on Japan's intelligence activities from the Sino-Japanese war to World War II. It emphasizes five points: 1) the interactions between Japan's diplomatic decision-making process and its intelligence activities, especially signals intelligence, 2) the comparison the IJA (the Imperial Japanese Army)'s intelligence and the IJN (the Imperial Japanese Navy)'s intelligence, 3) MOFA (the Ministry of Foreign Affairs)'s own intelligence activities, 4) Japan's counterintelligence, 5) the reactions of USA and UK to Japan's intelligence activities. I had published an article on Japanese intelligence against USSR during the 1930s, while I had kept analyzing the SIGINT (signals intelligence) by the Japanese Consulate-General in Shanghai during the Sino-Japanese War.

研究分野：日本政治外交史

キーワード：インテリジェンス 通信諜報 特種情報 政軍関係

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの近代日本政治史研究あるいは外交史研究において、三谷太一郎や細谷千博等による外交・安全保障政策の形成過程やその背景に関する優れた研究は多数発表されている。しかし、外交政策の成否を決めるインテリジェンス(情報収集及び情報保全(防諜))に関する分析はあまり行われてこなかった。一方、欧米ではインテリジェンスに関する研究は盛んに行われており、米国や英国の公文書館では、CIA(米国中央情報局)やMI6(英国情報局秘密情報部)が実際に収集した秘密情報に関する資料が公開されており、これらを基にした学術研究も盛んに行われている。

しかし、2000年以降、『情報史研究』や『Intelligence』等といったインテリジェンスの歴史を取り扱った学術雑誌の創刊が相次ぎ、日本におけるインテリジェンス、特に無線傍受や暗号解読等のシグント(SIGINT: signals intelligence)の外交政策への影響に対する関心が高まっている。これについて、加藤陽子は「〔一九〕三〇年代の外交と軍事は、暗号解読をはずしては語れない」と述べ、外交・安全保障政策におけるインテリジェンスの重要性を指摘している。

また、外交・安全保障政策の決定過程において、相手国の意思決定に関する情報は非常に重要である。これについて、主要な仮想敵国であったソ連に対する日本のインテリジェンスについて、黒宮広昭が日露双方の史料を用いた論考を発表し、大きく発展している。しかし、他の主要仮想敵国であった英米に対する日本のインテリジェンスに関する研究、特に英米国内で実施されたインテリジェンスについては、十分に明らかにされていない。日本がどのような認識のもとに対米英政策を実施したのかを解明する為、これを解明することが重要であり、研究の展開が期待されている。

## 2. 研究の目的

応募者は日本のインテリジェンスの中でも、シグントに注目して研究に取り組んできた。これまでの研究においては、戦間期日本における情報収集能力が、米英に劣るとは言え、一定の水準にあり、それなりに外交政策や軍事作戦に利用されていたことを明らかにした。

インテリジェンスにおいては多くの情報源から多数の情報を収集し、それらを照合・解析することが重要である。その為、本研究においては、これまで応募者が行ってきたシグント関連の研究成果及び先行研究の課題を踏まえ、公開情報の収集であるオシント(OSINT: open source intelligence)やスパイ等の人的情報収集活動であるヒューミント(HUMINT: human intelligence)をも包含した複層的な分析を行い、インテリジェンスの政策決定過程への影響を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究においては、上記の目的を達成するために、作業(防衛省防衛研究所戦史研究センターでの個人文書の分析)や作業(国立国会図書館憲政資料室での個人文書の分析)、作業(外務省外交史料館での公文書の分析)、作業(米国国立公文書館での公文書の分析)などといった調査分析に加え、作業(その他の研究実施計画)や作業(成果公開)といった補完的な作業を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 本研究の成果

平成25年度は、本研究の実施初年度であることを踏まえ、本研究の最重要課題である戦前期日本におけるインテリジェンスの実態解明の一環として、軍部、特に陸軍や外務省において情報活動に参画した軍人や外交官のキャリアパス分析を行った。その結果、情報部門と作戦部門(或いは省部の枢要な部署)双方をバランス良く経験した人物が一定数いたことを抽出した。また、廣田弘毅が外相を務めた日中戦争前後の外務省内における幹部間の人的関係についても分析するとともに、いわゆるノンキャリアの役割についても分析した。これらの研究成果については、公刊論文(「廣田弘毅と外務省人脈」『歴史読本』8月号)および研究報告(「昭和期日本陸軍情報部門担当参謀のキャリアパス分析 作戦部門との対比を通じて」情報史研究会2013年12月例会)として発表している。

また、昭和戦前期日本陸軍の最大の仮想敵国であったソ連に対する情報活動について分析し、乾盆子島事件や張鼓峰事件等といった事実上の日ソ国境紛争や、独ソ戦勃発以後の時期を事例とした情報活動の実態を明らかにした。更に、陸軍だけでなく海軍が取り組んでいた対ソ通信情報活動についても言及した。なお、この研究成果についても、公刊論文(「昭和戦前期日本軍の対ソ情報活動」『軍事史学』第49巻1号)および研究報告(「独ソ開戦以後の日本の対ソ情報活動と戦中期対ソ認識」軍事史学会関西支部第98回例会)として発表している。併せて、戦中期の駐スウェーデン陸軍武官小野寺信の情報活動についても分析を行い、専門家だけでなく一般にも反響のあった著作(岡部伸『消えたヤルタ密約緊急電』)に対する書評も執筆し(『戦略研究』14号)太平洋戦争中の日本の欧州での情報活動についても再検討を加えている。この書評では、とかく批判的となりやすい瀬島龍三にも言及し、岡部氏とは異なる見方を提示した。

平成26年度は、前年度の研究成果を踏まえ、本研究の主な目的である戦前期の日本におけるインテリジェンスの実態解明について、国立国会図書館憲政資料室が所蔵している島内志剛の個人文書を分析し、日本陸軍における対ソ通信情報活動の実態を明らかに

した。この研究成果については、研究報告（「昭和戦前期陸軍の対ソ連通信諜報活動 島内志剛文書を中心に」早稲田大学 20 世紀メディア研究所第 91 回研究会）として、発表している。

また、先行研究においては、陸軍をはじめとする軍部によるインテリジェンス活動に注目が集まりがちであったが、平成 26 年度は外務省における通信情報活動、特に従来知られていなかった日中戦争期に上海総領事館で行われていた通信傍受活動について、その実態を明らかにした。なお、この研究成果についても、公刊論文（『Intelligence』第 15 号）として発表している。併せて、米国国立公文書館においても史料調査を行い、米国が実施した対日情報活動などの史料を収集するとともに、外務省外交史料館などの日本国内の文書館などにおいて現存していない外務省の暗号電報を閲覧し、張鼓峰事件時の外務省本省とモスクワの日本大使館をはじめとする在外公館とのやり取りの実態を調査している。

平成 27 年度は、本研究の実施最終年度であることを踏まえ、これまでの調査研究の成果を総括するとともに、本研究の主たる目的である戦前期の日本におけるインテリジェンスの実態解明について、太平洋戦争開戦時のマレー・シンガポール戦におけるイギリス軍の動向に関する日本側の情勢分析に関する調査を実施し、その実態を明らかにした。この研究成果については、研究報告（「1941 年における日本の情報活動とその影響」明治大学政治制度研究センター第 9 回定例研究会）として、発表している。

また、日中戦争期における在上海日本総領事館および在香港日本総領事館が実施したインテリジェンス、特に人的情報活動（Human Intelligence）に関する分析を行い、その実態を明らかにした。なお、この研究成果についても、研究報告（「日中戦争期日本外務省の対中国情報活動」早稲田大学 20 世紀メディア研究所第 101 回研究会）として、発表している。

そして、本研究の実施最終年度であることを踏まえ、これまでに発表した公刊論文や研究報告をもとに、これまでの先行研究においては十分に明らかにされてこなかった昭和戦前期日本におけるインテリジェンスの実態を明らかにした。この調査結果についても、論文執筆・投稿あるいは研究報告などを通じて、積極的に発表することを予定している。

（2）本研究の実施によりもたらされた研究成果の意義・重要性

本研究は、日本政治外交史のみならず、国際関係論などの諸分野に対しても、大きな波及効果が期待できるが、平成 25 年度に実施した研究を通じて、ある程度の知見の提供を達成できたものとする。

また、張鼓峰事件については、これまで軍

部におけるインテリジェンス活動に関する学術論文を発表しているが、平成 26 年度に実施した研究を通じて、日本国内に残存していない外交電報を収集したことにより、外務省を主体とするオーソドックスな外交史研究を進めるための展望が開けたことが大きな成果として挙げられる。

そして、平成 27 年度に実施した研究においては、外務省と陸海軍、あるいは本省（外務省、陸軍省・参謀本部および海軍省・軍令部）と出先機関（在外公館および現地部隊）との関係性に注目したが、これはオーソドックスな外交史研究とは異なる視点を提示したことを意味しており、今後の外交史研究を発展させる上で重要な視座を提供したと史料する。

これらの研究成果を総合すると、本研究の実施により得られた研究成果は、これまで学術論文や研究報告において述べてきたが、日本政治外交史のみならず、国際関係論などの諸分野に対しても、大きな波及効果が期待できるものである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

宮杉浩泰「日中戦争期上海総領事館における通信傍受活動」『Intelligence』第 15 号（文生書院、2015 年 5 月）151-158 頁（査読あり）。

宮杉浩泰「書評 岡部伸著『消えたヤルタ密約緊急電 情報士官・小野寺信の孤独な戦い』」『戦略研究』第 14 号（2014 年 3 月）116-122 頁（査読あり）。

宮杉浩泰「広田弘毅と外務省人脈」『歴史読本』2013 年 8 月号（2013 年 8 月）86-91 頁（査読なし）。

宮杉浩泰「昭和戦前期日本軍の対ソ情報活動」『軍事史学』第 49 巻第 1 号（2013 年 6 月）96-114 頁（査読あり）。

〔学会発表〕（計 5 件）

宮杉浩泰「日中戦争期日本外務省の対中国情報活動」早稲田大学 20 世紀メディア研究所第 101 回研究会（早稲田大学早稲田キャンパス、2016 年 3 月 26 日）（口頭発表）。

宮杉浩泰「1941 年における日本の情報活動とその影響」明治大学政治制度研究センター第 9 回定例研究会（明治大学駿河台キャンパス、2015 年 7 月 23 日）（招待講演）。

宮杉浩泰「昭和戦前期陸軍の対ソ連通信諜報活動 島内志剛文書を中心に」早稲田大学 20 世紀メディア研究所第 91 回研究会（2015 年 3 月 28 日）（口頭発表）。

宮杉浩泰「昭和期日本陸軍情報部門担当参謀のキャリアパス分析 - 作戦部門との対比を通じて」情報史研究会 2013 年 12 月例会（2013 年 12 月 20 日）PHP 研究所京都本部（口頭発表）。

宮杉浩泰「独ソ開戦以後の日本の対ソ情報活動と戦中期対ソ認識」軍事史学会関西支部第98回例会(2013年7月13日)名城大学名駅サテライト(口頭発表)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮杉 浩泰(MIYASUGI, Hiroyasu)  
明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員  
研究者番号：30613450

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：